

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 平成27年 6月20日
(35号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
文責 事務長 宮本眞弓

人間学講座
第36講

「空手を通して
見える子どもたちの成長」

瀬戸謙介先生



■ 体力の限界は 人間の限界ではない

人間の限界ではない

今年で三八年目となる瀬戸塾では、子どもたちに「君子を目標せ」と伝えていきます。塾では空手だけではなく、いかに人間を形成していくか、知行合一を目指しています。

道場で教えるのは「空手術」。武術を教わる以上、子どもたちには「絶対に強くなること」を教えています。空手をやっていて「強い」ということは絶対条件。強くて自分に自信を持つからこそ、人に優しくなっていく。弱い人間が優しくなるのは媚びているだけで、みつともない姿。心を開いて優しくなるためには、強くなることだ、と子どもたちには教えています。まずは喧嘩に強くなり、さてそこから何を学ぶかが人生を大きく左右する。空手には、基本、型、組み手という練習方法があります。一番単純で一番疲れるのは「基本」です。しかし、毎回基本をやるうちに、子どもたちは「これは当然やるもの」ととらえ、理屈なくやっていきます。人間の生きる道も同じで、子どもの小さいうちに「人を傷つけてはいけない」「盗んではいけない」「嘘をついてはいけない」

等人間としてはいけない行いであることを、きちんと教え込めば、子どもたちは理屈ではなく、「だめなものだめなのだ」と感覚として身にしみこませます。

子どもたちに型を教えるときは、一人でも少しでも気が抜けていたなら、連帯責任で全員やり直します。くり返しやりなおすうちに子どもたちは体力的に限界にきます。しかし最後に揃うときには見事な姿を見せてくれる。つまり、体力の限界

は人間の限界ではない。こうして子どもたちは、体力は気力でカバーできるということを身をもって学びます。できたときの子どもたちは晴れがましい顔を見せます。こうして自分の体力を気力でコントロールできることを知った子どもたちは一回りもふた回りも成長します。

■ 正しい判断のできる大人になるために

強くなることは最低条件ですが、人間の成長には学問が大切です。頭まで筋肉になってしまいうな人間は、体力の限界が人生の限界となる。

子どもたちには日本の精神・文化の素晴らしさ、正しい歴史を教える必要があります。日本に生まれてよかった、日本人でよかった、日本に誇りを持てるように子どもたちに話します。日本ほど治安が安定していて、民度が高く、人種差別のない国はないのです。

現在論語の勉強会では、四歳から八八歳の方が参加されています。論語の素晴らしいところは、人間としてあるべき姿を簡潔、的確に本質を捉えているところです。子どものうちに正しい生き方を読み聞かせし、心の奥底にしっかりと善悪の基準を作ってやるのが大切だと思っています。人生の芯をしっかりと作り上げておくと、たとえ枝葉ではくぐらないことをしたとしても、人生だめになる道へはけっして行かない。正しい判断のできる人間になります。

しかし、基準を教え込まれないまま大きくなると、判断基準は「損得勘定」になってしまいうでしよう。今の世の中の多くの人はそうなってしまうのではないのでしょうか。

■ 武士の徳目

かつての日本には、全ての世代に共通の倫理観・道徳観



がありました。目上の人を敬うこと、親を大切にすること、勤労の大切さなどです。人は共通の意識がない限り、こちらの価値観を押し付けても反感を買うだけです。

江戸時代、全国津々浦々に寺子屋が二万以上あったといわれています。そこでは論語などの四書五経を読み、人として生きる道を教えていました。皆が根っここの部分で同じ認識を持って生き、だから社会全体が安定していました。

今の日本は人との関わりを避け、激論など聞かせる場所がない。常識とされてきた倫理観が崩壊し、家庭や学校が荒廃しています。瀬戸塾では、日本人として誇りを持って生きていけるよう共通認識を育てるべく論語のほか、偉人の話や武士の徳目などを教えています。

武士の徳目とは、「正義」「礼儀」「忍耐」「廉恥心」。礼儀とは相手を思う心。廉恥心とは、恥ずかしいことを恥ずかしいと思う心、今この心が失われつつあります。「誠心誠意」「慈悲心」。こういった尊い心を身につけ、いかに行動し、世の為に役立つようにするのか。全ての知識は行動することによって初めて生きた学問となります。

今の日本は自分たちが作り上げてきたものではありません。歴史学者のアーノルド・ツインビーの研究に、あれほど栄えた古代ローマ帝国がなぜに滅びたかが述べられてあります。

「一つの民族、国が滅びるのは戦争によってではない。ましてや天変地異や経済破綻によってでもない。自国に対する誇りや道徳が失われたときに民族・国家は滅びる」。

日本人の心の中に武士道があります。いかに美しく気高く、人から尊敬され、世の中に役立つ人間になるか。そうなるために日々の生活をどのようにならねばならないかというのを説いているのが武士道なのです。

(抄録 中川千都子)

《グループ討議》

瀬戸謙介先生の講義を拝聴した後、塾生が各グループに分かれ講話内容について討議しました。グループごとにまとめられた感動語録を発表しました。

【Aグループ】

- ① 体力の限界が自分の限界ではない気力により乗り越えられる。
- ② 本心に強い人間が人に優しくなれる。
- ③ 親の立場で論語を学んでいる。
- ④ 全体で同じことをやってみて他人のことが分かる。

【Bグループ】

- ① 武士道による徳育を幼い頃に施すのが大切。
- ② 愛国心を育てることの大切さ。
- ③ 体力の限界は人間の限界ではない。

【Cグループ】

- ① 君子になるように意識せよ。
- ② 本心に強くないと人に優しくなれない。
- ③ 民族は誇りを失ったときに滅びる。

【Dグループ】

- ① 日本人としての誇り、道徳教育、気力が大切。
- ② 損得より情が大事
- ③ 人間の限界は、気力の限界。

【Eグループ】

- ① 幼いときに人間としての道徳心を植えつける。
- ② 子どもには理屈ではなく、感覚として教え込む。
- ③ 武士道を教えていく。



《読書会》Aグループ

- ・進行 北嶋紀子 塾生
- ・テキスト 『先哲・石田梅岩の世界』
- ・指導 清水正博 代表

『実践人』(2015/3) 人生随想を配布され、梅岩先生を紹介され、森信三先生が、梅岩先生を高く評価されていたこと。清水代表が、心学講座に向けての活動を志向されていることなどを話され、商人道・詮議小売り・宗教観(多様な宗教を全て受け入れる)などについて解説がありました。

- ② 父の養育は正道を貫く
- ⑤ 商家の務めを怠りなく書に親しむ
- ⑮ 私塾開講
- ⑲ 門人への講釈と準備に終日を費やす
- ⑳ 地中の虫にも気を配る
- ㉓ お別れ
- ㉓ 夏は日陰を譲り冬は日当たりを譲る
- ㉓ 富の主は天下の人々なり
- ㉓ 道を知らない者は貪ることを努めて家を亡ぼす



《読書会》Bグループ

- ・進行 吉野秀則 塾生
- ・テキスト 森信三先生『一語一会』(5月)
- ・指導 近藤宏枝 塾生

五月一日 日常の雑事雑用を、いかに巧みに、要領よくさばいてゆかーそうしたところにも、人間の生き方のかくれた呼吸があるといえよう。

五月三日

人間のシマリは、まず飲食の慎みから。次には無駄づかいをしないこと。そして最後が異性への慎み。

五月四日

同僚より5分前に出勤する心構えーそれが十年も積み重ねられたとき、いつしか大きなひらきとなる。

五月十四日

国語教授にあたつては、解釈よりも朗読が根本なり。もし朗読にして恍惚として聞き惚れ、真に面白いと感じられるならば国語教育の目的の過半は達せられたというを得べし。

五月二十一日

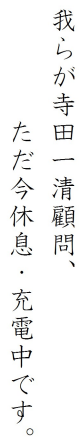
人は退職後の生き方こそ、その人の真価だといってよい。退職後は、在職中の三倍ないし五倍の緊張をもって、晩年の人生と取り組まねばならぬ。

五月二十三日

心願をもって貰かねば、いかに才能ありともその人の「一生」は真の結晶にいたらぬ。



寺田一清顧問の復帰を念じて!!!



森先生の語録集・講話録など多くの書籍の編纂・出版に努められ、寺田一清先生が居られたからこそ、ここに森先生の普及があると推察いたしております。

人間學塾・中之島が在るのも、寺田先生のおかげでもあります。一日も早く元氣を取りもどして頂き、いつもの笑顔で、我々に森教學を解りやすくお説き頂きお教えくださいますようここに集う者全員で念じております。



森信三『女人開眼抄』
が教える女性が幸せ
に生きる道

このほど弊社から刊行された『女人眼暇抄』は女性のあり方が民族の将来を決すると言えな
森田三先生が女性の生き方をテーマとした『女性のめもの幸福論』である。仕事、結婚、子育て
の日常さまざまな面で男女の世界が揺らぐ今日、生き方について言う女性も少なくないだろう。こ
今回は、そんな女性たちが幸福になる上で明快な指針となる『女人眼暇抄』について、森先生
の高弟である寺田・清氏に紐解いていただいた。



不尽叢書刊行会 代表

寺田一清

——昭和2年大阪府生まれ、旧藩校和田中学卒
専門学校に進むも病気のため中退。以後、家業の興
隆以来、森信三郎に師事、著作の編集発行を担当
実践者の家、元常務理事、編著書に「森信三郎一
日」の「修身教授録」家庭教育の心得21「父親のた
たけのたのめ人間学」「森信三小伝」「森信三の生き方
」など出版したに多数。

『女人開眼抄』復刊に思ふ

この度致知出版社より発行された森信三先生の『女人開眼抄』は、いかに生きた女性が自らの存在を聞かせる、幸福を得ることができ、かについて評述した本です。ともては昭和五十三年に森先生『不良少年』全五巻の第三集として発行されたものですが、長らく絶版となっておりまして、それがまた再び目の目を見るに至ったことは、誠に重大な意味を含んでいる

と題に承知のとおり、現代は「男女共同参画」や「夫婦別姓」が取りざたされ、事あるごとに男女同権が主張されています。そうした意識のもと本書をお読みになる方も古臭く感じ、あるいは反発を覚える方も少なくないかと思われます。かつて「女人聞眼抄」を女学大のテキストとして使っていた女大生の反応でした。その時の女子大生のあたりかというと、「一割は「ここに書かれているとおどかし」肯定され、二、三割が「おばあち

『致知』2012/10より

森信三先生とは三八歳のときにご縁をいただき今日に至っておりますが、これは奇縁と申すしかありません。

もともと私は呉服屋であり、学問とか思想とか一切関わりはなかったのですが、小学校時代の恩師をお訪ねした折に、その先生に勧められ、森信三先生の全集全二五巻を求めたのでした。内容は難しいものかと思いきや、風呂の入り方、寝るときの注意、食事の仕方など、日常茶飯のことが書いてある。とりわけ私は「飯菜別食完全咀嚼法」という食事の仕方に「これだ!」と思いました。よく嚙んで食べよ、とはほかでも聞くが、ここまで具体的であれば、私にもできると思えたのです。全集を求めたのをきつかけに、森信三先生とお目にかかれることができないました。

昭和四十年のことです。そのときに私は「求め求めていた生涯の師は、森信三先生以外はない」と一心決定したのでした。その後二七年お仕えをし、お叱りも受けました。「あなたとは縁なき者と諦める」と言われたことも三度ありますが、それでも懲りずに翌朝また先生のもとに出かけていく。「たいていは外壁の窓から、森信三とはどういう人か」とのぞいて、入つてこようとはしない。しかし玄関から入つて一直線に奥座敷まで来たのはあなただけだ」と先生からは言われました。

お出会いをいただき、森信三先生一筋に歩ませていただき、今年で五十年になります。

天下第一等の師につきてこそ
人間も真に生甲斐ありというべし。

年々死を覚悟して初めて眞の生となる。
絶対不可避なる事は

即絶対必然にして
これ天意と心得べし。

逆境は神の恩寵的試練なり。

■ 二十一世紀の日本の教育に大切なもの

「あいさつ」「ハイの返事」「履物をそろえる、立ったら椅子を入れる」：これらはなんでもない当たり前のこと。しかし、この三つを「しつけの三か条」として言っておられるのは、森先生だけです。いまや、アメリカの教育界において、「しつけの三か条」で、子どもたちが変わった、とその効果が認められ、広がりつつあるのです。

私が森信三先生から数え切れないほど教わってきたなかで、ひとつを挙げるなら、それは「立腰」というほかない。私も高齢者ですが、この腰骨を立てるということは完遂させていただけそうです。立腰することにより、①集中力②持続力③即応力が備わり、違つてきます。

二十一世紀の日本の教育について、一番何が大切かお聞きしたことがあります。「それは腰骨を立てる、ということだ。腰骨を立てることは、主体性の確立につながるんだ」と、やはり「立腰」の大切さを強調なさいました。

森信三先生からの数々の教えを大切に、これからも命ある限り、明るく素直で感謝を実践していこうと思います。

「ハイツ、ありがとうございます」

「中之島ニュース」20号より抜粋

寺田先生へのご連絡・問合せ等につきましては
學塾 中之島事務局宮本までお願いいたします。

《お薦め書籍》

『吉田松陰の女子訓』

川口雅昭 著



発行 致知出版社
 価格 一、四〇四円(税込)
 ISBN13:978-4-8009-1050-9

吉田松陰による女子へ贈る言葉、がテーマとなっている。妹千代や兄梅太郎、そして母瀧などに宛てた書簡、『武教全書』などの書物から、松陰が母や妹たちに向けた言葉や、女性のあるべき姿を述べた箇所を、著者が選び、解説を加えている。

例えば妹たちには「心清ければよし」と戒め、「よくないことに染まらぬように」と気を配り、時には俳句の指導もする一方、しっかりと婿を選び、場合によつては戦場にも行く覚悟も持てと説く。さらに著者は松陰の女性観、母への想いにも言及しています。

《先哲に学ぶ》

安岡正篤師

「恩に生きる」

口―環境と、大―人の手足を伸ばした相と、心とより成るものが「恩」の字です。何のおかげでこのように大きく存在しておるかと思う心が恩を知ることです。我々は天地の恩、人間の恩、道の恩、教えの恩など、あらゆる「恩」の中にあります。これに絶えず報いてゆくのが生活であります。

『安岡正篤一日一語』

より

《七月 人間学塾・中之島》

■ 基本カリキュラム

*日時 7月11日(第二土曜)

*場所 大阪大学中之島センター

10F 佐治敬三ホール

*講座 森 美智代先生

「少食は世界を救う」

21歳の時、養護教諭として勤務中に難病の脊髄小脳変性症を発病。余命5年とされたが、西式甲田健康法を実践し、断食と生菜食を続け、難病を克服。その結果として、「日一杯の青汁生活を20年間続けている。著書に『食べることをやめました』『マキノ出版』『食べない』生き方」サンマーク出版。映画「不食の時代」「食べることで見えてくるもの」に出演。

◆ 七月は、第三期の最終講座です。万障繰り合わせ頂きまして全員の出席をお待ちしております。
 また、八月は「卒塾式」です。
 今から出席への準備をお願いします。

《第四期に向かつて》 事務局からお願い!!

学塾・中之島事務局では、第四期へご登壇くださいます講師の先生方も決まり、準備万端整いつつあります。

第三期に在籍の塾生の方々には、次期へも継続くださいますことと確信いたしております。が、諸般の事情により今後の塾運営には、塾生在籍人数を最少80名が必要となります。

よつて、学塾・中之島の良さを十分ご理解くださっているみなさま方の口コミにより、広く入塾への勧誘やご推薦を求めたく、ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

なお、ご紹介、ご勧誘くださっています方々で、六月の体験講座に参加できなかったお方には、七月の講座におきましても、入塾を前向きに検討くださっている方々には、無料にて聴講頂き、入塾への足がかりに一步を踏み出して頂ければ幸いです。

《淀川掃除に学ぶ会》 短信

世話人 小西勝人

6月7日(日)は、梅雨の合間の快晴に恵まれ爽やかな掃除日和でした。参加者は約25名といつもよりは少なかったのですが、参加された方は皆、精鋭揃いでしたので意気軒昂に作業されていました。ただ、ゴミは思ったより少なく、川の上流から流れてくるゴミの量が、最近では少なくなってきたように思います。たぶん、上流の地域の方たちも、掃除の会などの活動により環境整備の意識が高まっているお陰だと感じております。

6月の掃除の会では、毎年、皆勤賞の表彰がありまして、今回は5名の方が受賞されました。受賞者は、東様、細川ご夫妻、鷺野様、柴田様の5名で、佐藤弘一様がご用意下さった賞品(Tシャツ)が、小西様より表彰状と共に贈られていました。

来月7月の淀川掃除は大変暑くなると思いますが、有志の方々にたくさんご参加頂いて、元氣良く掃除ができればと希望致しております。

問合せ 〇九〇―一八九四―一七六五(小西)

〇九〇―七五五―一八七七(志村)

